

Ⅲ セミナー参加者との質疑応答



| | |
|----|---|
| Q1 | <p>セミナーの講義の中では、「なぜサッカーゴールを固定して設置できないのか」といった話があったが、授業ごとにゴールを動かしたり、部活ごとに動かしたり、なかなか現実的には固定出来ない。どのように対応していけばよいのか、ぜひ先生方で研究して頂き、その成果を情報提供頂ければと思う。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・固定までしなくとも、重しを置くだけでもだいぶ違う。簡易なものでいいので、できれば 100kg、困難ならば動かすことが可能な重さのものを置くだけでも随分違うので、ゼロで諦めるのではなく、出来ることから実施することが大切である。 ・医療現場の立場からすると、同じ事故は同じように起こっているのでは何かの対策が必要。教育現場の教員だけの問題ではない。企業がより安全で簡単に、どこにでも付けて固定できるようなものを、早期に提供してもらいたい。また、児童生徒に「ゴールに飛びつくことは危ない」と言えるような教育も行いたく、プレゼンテーションを小、中、高校生に提供できるような映像に加工することは出来るので協力していきたい。 ・事故が起こる背景には、必ず無知と無理があると言われる。無知の点とは、「ゴールにぶら下がってはいけない」と注意しても、子供達はそれがどういうリスクがあるのかは理解していないということである。ダミーの人形を使ってサッカーゴールの下敷きになった場合の画像があれば、それを見せるだけでも危ないものと認識してもらえないのではないか。もう一つの無知という点では、自校のサッカーゴールの縦と横の長さは把握しているが、奥行きは意外と知らないということである。奥行きは様々であり、アンケートの結果、奥行きが浅いもので 80cm、深いもので 3.6m であった。深いものはほぼひっくり返らず、重心は下になるので、重しを置くにしてもある程度の重さで済むが、80cm では相当置く必要がある。100kg の重荷の話があったが、5kg の砂袋がどのくらい必要になるものか考えると現実的ではないとも思われる。もっと安全なサッカーゴールを作るという方向を、教育行政が考えなければいけない話であろうと思っている。 ・サッカーゴールだけでも事故防止対策には様々な課題があり、多方面から検討するべきである。自校で何が出来るかを考え、無理だからやめようという考えではなく、出来ることをやっていく、行政は行政でできることを考えていく必要があるのではないか。仕方がないから、ということで大きな事故が起こってしまうということだけは避けたい。先生方の学校のサッカーゴール、もう一回見直して頂ければ有難い。 |
| Q2 | <p>サッカーゴールなど体育時に使用する器具について、バレーコートの支柱にストッパーをつける等の例で見られるような、メーカー企業とチェックが出来るようなツールを作るという発想もあるのではと考える。企業と一緒に、安全に対する取組を実際しているのかどうかお聞きしたい。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・ぶらさがり注意喚起の i シールについては、サッカーゴールのあるメーカーが 2、3 年前から 4 月時に全国の小中学校に配っている。ただ、聴覚障害があれば読むでしょうが、普通の子供はシールだけではとても予防ができないように思う。 ・既に先行的な動きもあるとのことで、一つのアイデアではあるが、具体的な対策が必要かと思われる。 |
| Q3 | <p>バレーボールの支柱において、どのようなことが起きてネット巻き器がはね上がり、頭蓋骨開放骨折まで至る重大事故になったのか想像がつかない。また、ストッパーの設置について、どのメーカーの支柱にも付けられるものなのか、どういうふうに付ければ効果があるのか、具体的にもう一度聞きたい。</p> |
| | <p>バレーボールのネットの巻き上げは、ポールを前後から挟み込むような形で圧をかけて留めているだけなので、圧が緩くなると上にずり上がってくる。ウインチ（巻き上げ器）に力をかけ、ネットを張り出していくと上に引っ張られる力が加わり、引っかかるものを設置しないと外れてしまう。ゆっくり動いてくればよいが、一定のところになるとポンと上がることもあり、大きな事故が起こる。そのため、少しでも止めるものがあればよい。両側に多少の出っ張りがある支柱もあるので、多少緩んでいて上に滑り出しても出っ張りに引っかかり、止まるものである。大概是支柱のほうの設備で止めることができる。テニスのウインチはそもそも溶接されているが、バレーボールは倉庫から出して支柱を立てるもので、現状ではストッパーがないものが見られる状況である。</p> |
| Q4 | <p>日本スポーツ振興センターで全国の様々な情報を収集されているが、我々も現場でそれらのデータを活用できるように考えていきたいと思っている。情報を提供いただいたり、或いはどこでそういった</p> |

| | |
|----|---|
| | <p>情報を確認できるのかご指導いただきたい。</p> <p>また、裁判の判例を紹介いただき、過去の判例を見ると、我々がどういう点に注意をしなければならないのかのポイントが見えてくる。今回紹介いただいた判例以外に、どういう所で情報を得たらいいか等、非常に興味があるのでご紹介願いたい。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・日本スポーツ振興センターによる情報については、センターの「学校安全Web」というホームページ内で、様々な報告書をはじめ、教材カードなどの啓発資料を確認・ダウンロードできる。また、学校事故事例検索データベースにおいて、各種目別や校種別など、死亡・障害の過去の事例を見ることができ、参考となる情報が入手できる。 ・学校で実際にどのような事故が起きているかという例を探す意味では、日本スポーツ振興センターのデータベースでかなりの情報が得られると思う。過去の裁判例で、学校や教師がどのような責任を負わされたのかという話については、そういうテーマを取り上げた文献を参照するのが一番確実である。スポーツ事故や学校事故などのテーマで文献を検索していただくと、法律の専門家が書いている書籍が見つかる。インターネットにおいては、身分が分からない人が書いている情報よりも、専門家が書いている文献を参考にしてもらいたい。 |
| Q5 | <p>今年は非常に気温が高く、熱中症になりやすい環境であった。しかし、スポーツによっては体力を強化しなくてはならないため、部活動等をせざるを得ない場合がある。新人戦にあたり、メンバーを新人チームに切り替えた時に、活動の難しさを感じた。なるべく気温に合わせて練習をコントロールしていたつもりだが、今年は非常に難しかったと感じている。このような状況の中で、来年以降も気温の高さが懸念されるが、対処法などのアドバイスをいただきたい。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・休憩時間を適度にとること、また、飲水対策をしっかり行うというのが一番大事である。野球とサッカーでは運動量が違うが、野球の場合は最近では30分に1回の休憩が必要との話がある。大体、学校のバックネット裏に給水タンクがあり、生徒が休憩の度に飲みに行くのだが、例えば外野を守っている場合だと、なかなか飲みに行くことができないということがある。専門家に聞けば、外野を守る子のために給水ボトルを外野側に置いておくこと等の改善が必要とのことであった。ある程度の指導者は、熱中症に対する対策を98%知っていると言うが、実際には事故が起きている。その理由は、練習の指導や試合に集中して、指導者自身が、誰がどのくらい飲んだかを把握しておらず、同様に生徒も興奮しているので飲み忘れ、結果として事故が起こる。体調不良を訴えた子どもがいた場合には、その場で回復したとしても、帰宅途中や自宅での悪化も、今までの事例から十分あり得る。なかなか難しいが、帰宅途中や自宅での様子も見守ることが重要である。 ・経口補水液を扱う業者と話をする機会があり、スポーツドリンクと経口補水液を混同されている方がいて、同じような感覚で飲まれているケースがあるとのことだった。そもそもスポーツドリンクと経口補水液では、成分をはじめ目的が異なるため、ただ飲むだけではなく、そういった違いをよく理解した上で上手に摂取してもらいたい。 |
| Q6 | <p>今夏、プールでの熱中症対策に苦慮した。色々な文献によれば、プールでの学習に対する水温の設定や、学習効果が得られる水温の範囲などがあり、それらを参考に、地域の状況や子どもたちの状況に合わせて、学校ごとに基準が決められていると認識している。教育委員会からの明確なガイドラインは無かったと思うが、今年度についてはプールの温度の上限について気になった。何度以上であればプールを閉鎖する、又は学習の効果が得られない等、個々の学校単位で決めるとするのは非常に難しいので、そういったガイドライン等による提示があれば大変有難い。</p> |
| | <p>今年度の重点課題が熱中症であり、医学的に知見があるか等を情報収集しているところである。プールでの熱中症対策についても、今年度中に整理して報告する予定であるのもう少々お待ちいただきたい。</p> |
| Q7 | <p>水泳中の熱中症について伺いたい。どの程度の水温、気象で水泳授業を中止にするべきか教えてほしい。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・大学の水泳授業では、ドリンクの持参を認め、プールサイドでの摂取を認めている。高温を抑制する効果はあまり無いとは思われるが、対策の一つとして挙げられる。他の対策としては、日陰に行くといったところである。水泳の授業を中止にする基準があるかどうかについては、情報を持ち合わせ |

| | |
|------------|---|
| | <p>ていない。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・35℃の水温は、風呂の湯と同じようなものである。しかし、我々は日常、入浴を行う。気温と水温だけで決めようとしてはいけない。対策としては、短い時間でインターバルを取る等しか方法はない。参考までに、日本スポーツ協会では陸上競技についてのガイドラインがある。水泳については現在協議中である。熱中症は色々な要因がある。水温・気温については相対的な要因であるため、水温等で単純に判断しない方が良い。 ・水温・気温が何度になったら水泳を中止にする、という基準を作るのは難しい。 |
| Q8 | <p>女性教員が少ない中、女子生徒が倒れたとき AED の対応はどうしたら良いか。AED を使うことによって命は助かっても、生徒や保護者から訴えられないか。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・医師の立場から言うと、命を救うことが大事。上半身の衣服を脱がす必要は、必ずしもない。服の中に手を入れて、AED を装着することも可能である。 ・命とどちらが大事か考えれば、自ずと分かる。命を救う方が大事である。 ・生徒や保護者に、十分に説明すれば問題無い。 |
| Q9 | <p>本校の体育館に、はしご状の階段がある。上のギャラリーに上がったボールを取るため、その階段を登っていたとき、背中から落ちてけがをした。その後、階段に貼り紙を貼って利用禁止としたが、いつしか剥がれていた。いつまで使わないようにしたら良いか。</p> |
| | <p>学校種や学年で、対応は違う。高校生であれば、禁止にするのはどうかと思う。アルコールランプやマッチ、ナイフ等を「子どもには危険だから」と使わせないと、使い方を知ることができない。使わせないことにより、その後に生じるリスクを考えるべきである。環境と、何をやるかの組み合わせの問題もある。</p> |
| Q10 | <p>暑い夏に、体育課としては、授業をしたくなかったが、教務課としては予定授業数がこなせないため実施するように要請があった。水分を摂らせながら行ったが、もし熱中症等が発生した場合、教務課に責任はないのか。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・汗腺の数は3歳までに決まってくる。自分が子どもの時はこうだったと言っても、今とは環境が違う。県立学校で何か事故があっても、国家賠償法により先生の責任ではなく、すべて県の責任になる。 ・本校では熱中症対策を行い、休憩や水分を取るなどして熱中症はなかった。 ・ラグビーでも日陰を作るなど熱中症の対策はしている。できる限り配慮はしている。本来ならば環境に配慮して涼しい夜8～9時に照明をつけて試合をやるのが良い。熱中症にならないようにどれだけ対応できるか。WBGT を信じすぎないでほしい。 |
| Q11 | <p>熱中症が懸念される場合の、水泳大会等の実施の可否の判断基準があれば教えていただきたい。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・環境条件や、対策がどの程度されているのかによって、実施するかどうか判断することになる。 ・環境等の様々な条件を含めて、総合的に判断するべきである。 |
| Q12 | <p>体育活動の事故の傾向で、突然死の件数が突出している状況をお聞きしたい。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・AED や心肺蘇生法についてしっかり学んで、対応策を立てておくこと、また、健康観察やウォーミングアップを行うことが対策として必要である。 ・心臓系が多いため、通常的心電図等を確認して、傾向を観察しておく必要がある。 ・20数年前は、学校の管理下に置いても突然死の割合が非常に高かった。現在は相当減ってはいるが、突然死の場合は個人にもよる。予防としては、メディカルチェックを行うことである。また、AED の対応も必要である。 |
| Q13 | <p>学校の管理下の熱中症死亡事故について、9割が男性という説明があったが、この理由は何か。</p> |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・科学的な根拠はないが、強度の高いスポーツ（野球・ラグビー・サッカー等）は男性の競技人口が多くなっている。このことが理由として推測される。また、剣道や柔道は室内で行われ、防具や道着は分厚くて熱がこもりやすい。個人的見解ではあるが、男性の方がより達成しようとする努力をしてしまう。女性は限界まで達せずに止めることができるのではないかと。 ・男女差よりも、競技人口で考えた方が良い。 ・スポーツのみではなく、仕事や日常生活でも同様に考えられる。 |
| Q14 | <p>熱中症についてお聞きしたい。子供たちは暑い中でも外で遊ぼうとするが、外で遊ぶ際の判断基準</p> |

| | |
|-----|--|
| | <p>はあるか。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この気温だったらというのは無いのが現状だが、情報を参考に各学校で対応していただいている。 ・個人差もあるので一律ではない。熱中症は、部活動中の発生が圧倒的に多いが、自由に休めないことによるものではないか。休み時間は子供たちも適当に休めるので、特に発生していないのであろう。 ・カンボジアの小学校では、子供たちの運動時間を朝や夕方など気温が上がる前や下がった後の時間にしている。 ・明確な基準はないが、気温で規制するだけではなく、情報を収集して判断することも必要である。 |
| Q15 | <p>熱中症について、行政とスポーツ少年団との関わりの中で、学校が行っている取組があれば教えていただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本スポーツ協会が、スポーツ少年団の指導者に毎年、研修会を行っている。ただし、全ての指導者が受講しているわけではない。 ・安全指導のみではなく、スポーツ指導の在り方に関する取組が幅広く進められつつある。 |
| Q16 | <p>救急救命について、周囲を静かにさせる、周囲の状況を確認するなど、環境を整備する役割も必要だと感じたが、このことをどのような形で講習に取り入れるべきか教えていただきたい。</p> <p>受講対象者によって訓練のやり方を考えるべきである。対象者が教職員であれば、教職員はプロフェッショナルなので、リアリティーを求め、人数が多い場合は誘導の係など各役割を与えて、より高度なチームで救命措置を行う実践的な訓練になると良い。実際に学校で心停止が起こると混乱が起こるので、その時のためにシュミレーションを行うと良い。一方で、生徒などめったに現場に遭遇しない人たちには、あまり難しくせず、実際の現場は混乱するとは伝えたいので、完璧でなくていいのでそのとき何ができるのかシンプルに指導していただくとよい。行動を起こすことが大切であることを伝えることが重要である。</p> |
| Q17 | <p>柔道について、スライドの中で、畳の下にマットを引くことや、ばねのある畳があるということを知った。環境面で事故を防げる可能性やその用品について、情報提供をいただきたい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畳などの用具は各校の設置の在り方によって異なると思うが、武道が必修化になったことによって各校の環境整備の予算がついたのではないかなと思う。予算がついたことで用具を準備した学校もあれば、そうでない学校もあると思う。マット等、ある物を利用した安全対策をしていただければと思う。 ・用具に関する開発段階についての詳細は不明だが、現在使用しているものの性能を評価するツールはある。以前、亀岡市の保育所で雲梯から落下した事故があり、雲梯の落下事故を防ぐにはどうしたらよいか、と我々も評価を行うため伺ったことがある。一般に畳は性能がよく、床材に比べると脳のダメージを減らせると言われている。 |
| Q18 | <p>発表で、心肺蘇生実施率と社会復帰率のグラフを出していただいた。その中で、実施率が低いにも関わらず、復帰率が高い年があった。その理由は、心肺蘇生をされた方が非常に上手だったのか。救急救命の講習で、まず AED 胸骨圧迫を行うということを普及していくことが大事であるが、次のステップに進む際、スピードや押す力など、気を付けるべきことをこれから伝えていく中で、参考にできればと思ったため。</p> <p>データについては、症例が多くないのでデータのばらつきの範囲内であると思われる。統計的に見ると、胸骨圧迫と救命率の関係は他の要素と調整してもデータは変わらないと考える。その上で、実施するだけではなく、心肺蘇生の質が重要であるということは、救急救命の世界ではここ 10 年言われている。深さ、戻り、テンポなど様々であるが、中でも重要と言われているのは、心肺蘇生の中断時間である。胸を押す時間が短いと、心臓が止まっているのに中断が長いということである。医師等のプロフェッショナルが実施しても、50%くらいは中断している場合もあるので、質の中で最も重要なのは中断時間と言われている。一方で、深さも上手にやるよう教えましょうとプロには言い、実際に行っている現場で加速度センサーを取り付け、7cm の深さで胸骨圧迫ができていくか行いが、一般の人にそれを求めると難しくできないと思ってしまう人もいるので、あまり上手にとは言わないようにしている。関心を持って頂ける方には、上手にやることのメリットを話しても良いと思う。</p> |
| Q19 | <p>水泳の熱中症予防について、泳いでいる時以外にも熱中症に気を付けるべきところや、予防策など教えていただければと思う。</p> |

| | |
|------------|--|
| | 水泳時の熱中症は、ここ数年で注目されるようになってきた。陸上でのスポーツと異なり、プールでは体が濡れている状態のため、風に吹かれると気化熱が発生し、体温をすぐ下げることができる。予防策としては、必ずプールサイドに1か所は風通しのいい日陰を作ること。暑い夏のプールは、ぬるま湯のお風呂に使っているのと同じ状態である。その状態で運動すると、暑い日だと体温は40度を超える。氷や氷嚢などを用意し、脇や首、股間辺りを丁寧に冷やして欲しい。その前の予防として、ドリンクコーナーと日陰を作ることが最重要である。 |
| Q20 | 発表時の動画で、保健室に応急用のカゴがあった。本校でも用意しているので、参考のためにその中身を教えていただきたい。 |
| | 4パターンあり、中身についてはうろ覚えであるため、セミナー終了後に最新版も含めてお教えしたい。 |
| Q21 | 柔道のマットや畳など、掃除をどの程度行えばよいか。保管方法や衛生面について教えていただきたい。 |
| | 各校使ってすぐ片付けているのではないか。その状態だとダニが発生し、座るだけでお尻がかゆくなる状況である。天日干しできる場所があれば天日干しをしていただき、除菌スプレー等を使用するだけでも違ってくる。畳だけでなく、マットも不衛生だと感じることもあるので、養護教諭や体育科教員で考え、生徒のために対策を取って頂ければと思う。 |
| Q22 | 熱中症について、今年のように計測器が常に要注意を示している状況において、練習を含めたスポーツ活動を行わないわけにはいかない。今後、どのようなことを実施し、どのような対策をしたら良いのか、どうしたら活動できるようになるのか、それぞれの立場からお聞かせ願いたい。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・サッカー協会では、スポーツ救命講習会を実施しており、Jリーグのトレーナー等のジムドクター向けの講習会から始め、徐々に一般の方へ広げていくことを考えている。その講習会での大きな項目は「脳震盪」と「熱中症」になっている。どの団体でも同じような注意事項が出ており、現時点で最初にやって頂きたいことは、その注意事項に準拠することではないかと考える。 ・選手は暑熱馴化ということで、6月頃から段々と暑さに慣れてきている。しかし、大勢の観客への対策も必要である。これを如何に実施していくかもこれからの課題と思っている。高校野球における熱中症対策で難しいのは、観客対策と、高体連も高野連も夏休み中に競技を実施しようとする点である。 ・暑熱馴化に関する話があったが、日頃から暑い環境で鍛えられてると、慣れるのも早いのではないか。エアコンが完備された学校で8月直前まで授業実施することは、体が弱くなって暑さに耐えられず、次々に救急車に運ばれるのではないかと思う。とにかく急に暑くなるので、4月の中盤から夏本番に向けての熱中症対策の取組が必要ではないかと思う。こまめな休憩が、私の経験上は第一と思っている。 ・法的な観点からは、熱中症の分野の情報は次々に新しくなっているのではないかと思う。一年ごとに、専門家が言われる事も違うし、「何を基準に運動させる、させない」、「熱中症の症状になったらどのように対処するか」といった情報も数年前と今では変わってきており、新たな情報がどんどん加わってきているのではないかと思う。本事業においても、今年は熱中症について、新しくパンフレットとDVDを作成している。そのような新しい情報を入手し、昔の情報にとどまらず、どういう場合に危険が起きるのかという予見の幅を広げる。そして、もし起きた場合の対処、回避の方法を現場の先生方に認識して頂く事によって、万が一の重症事例も無くなるであろうし、先生方が責任を負わされる場面も減ってくると考える。 ・暑熱馴化対策というのはあまり実施しておらず、これからは重要であると考え。それから、水分・塩分の補給、休憩を取るとは、基本的な対策であり重要である。休憩は、暑ければ暑いほど頻繁に取るべきである。例えば「15分動いたら15分休憩取りましょう」と極端な話をする方もいるほど、休憩が非常に大事である。 ・運動する時間帯を、できる限り暑い時間帯を外し、上手く調整する。部活動や体育の時間や、場合によって出来ることと出来ないことがあると思うが、そういう原則を考えながら実施することである。さらに、子ども達の症状の兆候を見逃さないこと。子ども達の健康観察を丁寧にし、フラフラし始めた等様子がおかしい時、素早く体を冷やすとか、運動をストップさせる迅速な対応により、重篤な事態に至らない、そういう総合的な取組が必要になってくると考える。 <p>また、プール、グラウンド等は、日陰が無い所が非常に多いので、無ければ作らなくてはいけない。風</p> |

| | |
|------------|--|
| | で動かないようにする等の課題もあるが、大きなテント等を設置することが対策の一つである。熱中症が起きやすい時期、起こりやすい状況を出来るだけ早く察知し、その対策を出来るだけ早く実施していくことは、個人だけでなく、学校あるいはチームの組織的な対応として実施していかなければならないと感じる。 |
| Q23 | 保健の学習で、災害や事件から防ぐということについて、事例を交えて伝えるのが難しい。どのように計画すればよいか。 |
| | <ul style="list-style-type: none"> ・子ども達が学習することは、具体的な知識と災害のメカニズムである。これだけは押さえておかないといけないという知識をどう特定するか。軸としては、何かを防ぐときは、予防・対応・分析の3つを育てる必要がある。これらをそれぞれ小学校、中学校、高校に合わせて計画を立てるべきである。具体的な事例は思い浮かばないが、考え方としてはそういう形で取り組んでいくべきと考える。 ・こういう形でマネジメントすれば教育の成果が上がるという事例をぜひ長崎から発信していただきたい。 |
| Q24 | バスケットを専門にしているが、体育館での活動における熱中症に神経を使っている。気温計・湿度計を活用し、時には大型扇風機を使用している。他にできる対策があれば教えていただきたい。 |
| | <p>環境要因だけでなく、個体の要因も重要である。睡眠不足とか朝食を抜いている等があると熱中症になりやすい。また、水分補給についても摂り方が重要である。一度に多くは飲めないで、こまめに飲む必要がある。また、練習やトレーニングの内容についても、その運動量を考える必要がある。カンボジアの小学校では、子供たちの運動時間を朝や夕方など気温が上がる前や下がった後の時間にしている。</p> <p>体格のいい生徒が熱中症になりやすい傾向にある。また、身体を冷やすことを本気で考えないといけない。氷で冷やすレベルだとそれほど体温が下がらず助からない場合がある。水道で水をかけ続けることで、救急車が来るまでに体温を下げるができる。そこまでしないと、子供の命を救うことができないという医師からの指摘がある。身体を冷やすというのは極めて緊急で、生命に影響を与える。「冷やす」ということは突然死における AED の装着と同様に、生命活動に重要だということを知っていただきたい。</p> |
| Q25 | 噛む力と運動能力とは関係があるとのことだったが、噛む力を上げるトレーニング方法や、噛む力と他の能力の関係について教えていただきたい。 |
| | よく噛んで食べるのが重要である。それに加えて、チューインガムを噛んで刺激を入れることも、噛む力の向上に繋がる。また、噛む力とバランス能力は関わりがあるのではないかと報告もある。 |
| Q26 | 大外刈りの指導は、段階を追って行っているが、危険な場面があり反省している。県によっては禁止しているという話も聞く。大外刈りの安全な指導方法について、教えて頂きたい。 |
| | 大外刈りは難しい技である。段階的に行うことになるが、後半（柔道の初期に指導ということではなく慣れてから）に行う等の配慮が必要になる。外傷予防としては、横受け身を取るよう指導いただくことが有効と思われる。また、投げる側は引き手をするのが重要だが、余裕がないとできない。技のレベルや体力が十分でない場合は、大外刈りを控えさせることも考えるべき。ただ、禁止するというのはいきすぎであると感じている。 |
| Q27 | 発表の中で、法的根拠は特別活動の注意書きのところにあるという話をされ、体育学習要録には記載がないということで、労働基準法やチアリーディングのルールのところを例に出されて説明されましたが、小学校・中学校・高校でこれくらいが目安・基準というのがあれば教えてほしい。例えば、タワーの段数や人数、演技の時間、だいたい1学年入退場を入れて10分くらいと言われていて、5～6年生で10分～20分の演技をしているところもあるので、発達段階でどのくらいというのを教えてほしい。 |
| | 高さに関しては、補助が出来るか出来ないかで考えて頂きたい。小学生がピラミッドの5段立てるといことが実際ありますが、5段立てるのは高い。大学生でも4段が精一杯。これ以上高いのは難しい。ただ上に上れば良い訳ではなく、上に上がるまでにどれだけ下が大変かということも考えた時には、小学校は3段までかと思う。ピラミッドは3段まで、タワーは2段以上上げるのは大変だと思う。補助できないので、3段以上に上げてはいけないと思う。時間に関しては、発表の中で見て頂い |

| | |
|-----|--|
| | た参考のものは5分弱。集中力が続くのは5分位だと思う。繋ぎに入場を考えたり、作りについて急がせないで、次の体系に入る前の行進の演技等を入れると集中力の続く時間は伸びるかもしれない。 |
| Q28 | 学校のスポーツ事故で多いもので、一番に思い浮かぶのは器械運動や跳び箱等で、実際に自分のクラスで骨折させてしまったことがあるが、器械運動の安全面で気を付けておいた方がよいことがあれば教えて頂きたい。 |
| | 跳び箱は、小学校では開脚飛びをしようと思うが、まずリズムを掴ませることが大切である。1、2、3、のリズムで、1飛ぶ、2手をつく、3足をつくのリズムで飛ぶようにする。飛べない子より、飛べる子の方が危ない。必ず自分にあった高さがあるので、その高さで飛ぶこと。高い方がよいのではなく、オリンピック選手でも自分の高さに合わせるので、自分の高さで飛ぶことが大切である。 |
| Q29 | 体育大会の中で組体操を行っているが、だいたい上半身裸で行っている。9月に行われるので、汗だくで行う時もあれば、雨が降って寒い中で行うこともある。裸でしない方がいいのか、チョークを塗って滑り止めはしているが、裸でする際はこういった対策があるのか教えてほしい。 |
| | 戦争時、兵隊の訓練の際の組体操の流れがあり、安全のため身に何もつけない、引っかかったら危ないという理由からだと思う。汗をかいて滑ったらどれだけ危ないかと考えると、裸は中止した方がよい。滑るものは良くないと考える。落ちたり転んだりした時も、裸だと傷つきやすいのでシャツなど来た方がよい。学年ごとにシャツの色を変えるなどして演出するとよい。勇ましさを狙うのであれば、黒のシャツを着るなど今の時代に合ったように変えた方がよいと思う。 |
| Q30 | 7時間単元の流れについて詳しく教えてほしい。また、運動会は体育の授業の発表の場と位置づけられているが、実際はそうっていない。普段の準備運動から、組体操・演技に繋げるという流れの工夫があれば教えてほしい。 |
| | 学校による力の入れ方で、練習時間が違うと思うが、新しい年度が始まってすぐや夏休み明け等、先生方が忙しい時期に何時間、練習時間が取れるのかをよく検討するべきである。無理な計画は、実施が困難である。どれくらい練習できるか、どれくらいのものを作るかで考えなくてはいけない。最後に全員で、次に5人のもの、その前に身体をウェーブ、その前に3人組・2人組などの組運動と組み立てていく。毎時間毎時間、今日はこの時間でこの運動、と組み立てていくと7時間くらいあればできる。最初は一人で身体を動かしていく等、心の準備をさせて、2人組、3人組としていく。出来る範囲の内容のものをさせるといったことで、けがをさせないことが重要である。もし、けがをしてしまった時には、無理をしてしまったのではないかと、本番までに1回も成功していないことをなぜさせるのかということが問題になると思う。最後は完成形を作品として発表することとなるが、それまでの授業で楽しさや悔しさを感じる事が大切だと思う。 |
| | 普段の準備運動から、組体操・演技に繋げるという流れとしては、最初から全部のストーリーを考え、一つの表を作ってちゃんと伝え、最初に子ども達、最終的に補助に入る教職員達にもプレゼンテーションをする必要がある。何となく頭から作って行って、出来る所まで、とかではなく、周りにも子ども達にもちゃんと理解させていくということが大切だと思う。あとは、体育の時間の中で少しずつ組運動など体験させていくことが大切だと思う。 |
| Q31 | 1人で1人を支える補助倒立を成功させるには、どのようにしたらよいか教えてほしい。 |
| | 補助倒立で補助をする人は、倒立する人の振り上げる足側の横に立ち、振り上げる足の膝を持ってあげると成功しやすい。 |

※会場における口頭でのやりとりをまとめたものです。